秋下、教定、露むすぶ門田のをしねひたすらに月もるよはゝねられやはする、拾玉二早苗　小山田のをしねのなへのとりゝにみゆるうゑめのすがたなるかな、長秋詠草中田家鶯、ますらをが秋のをしねをまつがきにまだ春ふかき鳥の聲かな、雲葉集前内大臣家　もみぢばをそめてしぐるゝ秋山におくてのをしねほしやわぶらん、貞治年中行事歌合、關白良基公不堪田奏、此秋は千町のをしね數そひて作るに堪ぬ坪付もなし、これらの歌いづれもたゞ稲の事によめるをおもふべし、

〔成形圖說十六五穀〕宇流志禰○中略

奥手、萬葉集○中略　於志禰、○註略　遲稲、オクレイネ　後稲、オクレイネ　田床、トコ　床は卽地なり、此者久しく田地に在るより呼べり、晩稲爾雅翼、本艸時珍云、十月收者爲晩稲、又云、諸本艸獨以晩稲爲穎者非矣、今按に吾邦古の時に、凡稲の名を奥年となも稱て、晩稲の事に係てしは、稲の最上もの、なるがゆゑなり、さらば彼土のむかしも、かくぞありて、晩稲の事を稷とのみせるもありぬべし、時珍却てしりぞけしは、方なるを圓にせしともいふべし、通雅云、東壁事以糯爲稲、殆泥稷稲之注乎、晩稲未必盡是穉也、穉、禮記、穉稑之種、註先種後熟曰穉、詩疏穉作童註同、稺、內則註、稺音酉、熟而穫之曰稺、正字通云、卽今晩稲也、是此間の俗謂出來刈也、宜しく穉の字と照し考ふべし、晩米、本艸必讀晩禾、說文

奥手は卽奥年なり、奥は後、オクル、と通ふ、其熟の遲をいへり、年は前にいへるがごと、穀の名なれば、猶晩禾とあるにひとしきぞ、さるを奥手は唯晩の義とのみ解は、手といふこと、何なるわけをしるべからず、

〔清良記六上〕五穀雜穀其外物作分號類之事○中略

晩稲之事

一黑小法師　一黑定法師　一小兒　一大白草　一小とを　一下蜆　一大堂後稲

一大ぎんばる　一打稲　一邊土稲　一小ぎんばる　一赤我社　一井手口　一小堂後稲

一大ゑはる○一本作大ゑはる下同　一小白草　一鹿威　一小ゑはる　一晩半毛　一赤髭　一小的草

一赤草　一雀稲　一霜稲

右廿四品は晩稲也、其內上十二は晩中稲の次、下十二は一の晩稲也、三月中時分苗代を仕廻五